

YNU 書き言葉コーパスに見られる

日本語学習者の接続詞の使用について

—韓国語母語話者の「逆接」関係の接続詞に注目して—

金 蘭 美

1. はじめに

日本語学習者の書いた文章のわかりにくさの原因は様々であるが、接続詞もその一つであると言われている。日本語学習者がある程度長さのある文章を日本語で書けるようになるためには、文法や語彙の適切な選択に加え、文と文、あるいは段落と段落を関連付けながら書く力が必要となる。読み手にとって読みやすくわかりやすい文章にするためには特に接続詞の使用に注意する必要があるだろう。日本語学習者の誤用の原因はしばしば母語の干渉であると言われることが多いが、接続詞の使用においても同様であるかの検討が必要であると考えられる。本研究では、「YNU 書き言葉コーパス」を対象に日本語学習者の接続詞の使用に焦点を当て、学習者の母語別に見た使用状況の違いがあるかどうかを明らかにし、さらにその原因についても言及する。

2. 先行研究

2. 1 日本語学的観点からの研究

接続詞における日本語学の観点からの研究は、接続詞の機能に注目し、接続詞を類型別に分類を試みている研究や、個別の接続詞の意味機能に関する研究が主流である。接続詞の類型に関する研究としては、市川（1978）、佐久間（1983）などが挙げられる。市川（1978）では、文と文の論理的な関係そのものを「文の接続関係」と呼び、表1の8つの型を基本的な類型として挙げている。表1は市川（1978）で挙げている接続詞の類型とその機能および該当する接続詞をまとめたものである。

表1 市川（1978）における「文の接続関係の基本的類型」（pp. 89-93）

類型	接続詞の例
順接型	前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型。 だから・ですから・それで・したがって・そこで・そのため・そういうわけで・それなら・すると・してみれば・では・すると・と・そうしたら・かくて・こうして・その結果・それには・そのためには
逆接型	前文の内容に反する内容を後文に述べる型。 しかし・けれども・だが・でも・が・といっても・だとしても・それなのに・しかるに・そのくせ・それにもかかわらず・ところが・それが
添加型	前文の内容に付け加わえる内容を後文に述べる型。 そして・そうして・ついで・つぎに・それから・そのうえ・それに・さらに・しかも・また・と同時に・そのとき・そこへ・次の瞬間
対比型	前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型。 というより・むしろ・まして・いわんや・一方・他方・それに対し・逆に・かえって・そのかわり・それとも・あるいは・または
転換型	前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型。 ところで・ときに・はなしかわって・やがて・そのうちに・さて・そもそも・いったい・それでは・では・ともあれ・それはそれとして
同列型	前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型。 すなわち・つまり・要するに・換言すれば・言い換えれば・たとえば・現に・とりわけ・わけても・せめて・少なくとも
補足型	前文の内容を補足する内容を後文に述べる型。 なぜなら、なんとなれば・というのは・ただし・もともと・ただ・なお・ちなみに
連鎖型	前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型。 (接続語句は普通用いられない。)

また、佐久間（1983）では、市川（1978）をはじめとするそれまでの文の接続関係の類型を扱っている一連の研究（森田 1953、永野 1959・1972、林 1964、井出 1965、塚原 1969、土部 1962・1972）を取り上げ、それぞれの類型における異同を検討している。佐久間（1983：40-42）は、今までの文の接続関係の考察は「接続詞の意義・用法の分類を基礎としたものが多かったため、結果的には共通点の多い類型が立てられたが、その詳細を検討すると、かなりの異同がある。従って、類型目の数不一致の結果となっている。（中略）各人の日本語の論理のとらえ方や接続詞の認定基準・意識・用法についての考え方は相当異なることが予想できる」と述べている。さらに、西（1995）では、新聞社説における接続表現の出現状況を調べるに当たり、佐久間（1983）で扱われた文の接続関係の類型の諸説7つに佐治（1970・1987）および田中（1984）の分類を加え検討を行った。その結果、「諸説中最も多く使われている接続関係の名称が、「累加型」以外はすべて市川案と一致していることがわかる

(pp.85-87)」とし、市川案を基本としながら独自の異種類型の複合型を加えた八種の接続類型を用いて分析を行っている。以上の先行研究を踏まえ、本稿でも、接続詞の類型に関しては、市川(1978)の案にならって分類を行った。

2.2 日本語教育学的観点からの研究

日本語教育学的観点からの研究としては、日本語学習者の接続詞の使用状況を調査した浅井(2003)、倉持・鈴木(2007)などが挙げられる。

浅井(2003)では、日本語母語話者30名、上級日本語学習者(中国語母語話者)32名に「ゴミ問題の現状と解決法」をテーマとした800字程度の作文を書いてもらい、それらにおける接続詞の使用状況を比較・分析している。その結果、学習者の方が接続詞の使用数・種類ともに多く、これは母語話者が接続詞を使わない場合でも学習者は接続詞を使うためであると指摘している。また、接続詞の種類を比較した結果、母語話者は、「添加」>「逆接」>「同列」の順、学習者は「添加」>「逆接」>「順接」の順であったとし、母語話者の「同列」と学習者の「順接」の違いに関しては、学習者は論理関係をはっきりしようとする傾向があるためであると指摘している。

倉持・鈴木(2007)では、留学生の接続詞の使用状況の調査を実施し、①学習者は接続詞をよく耳にし、目にしている割に正確に使えない。②接続詞習熟には日本滞在年数は関係なく、機関・教材・教え方などの学習方法の工夫が必要である。③接続詞は自然習得しやすいもの(「だって」など)も一部あるが、しにくいものが多い。④これまで初級のものでとされてきた「そして」「それから」、2級基準の「すると」に誤用が多いということを報告している。特に、「並列」の「そして」に関しては、主に書き言葉で使われる傾向が強く、むしろ中級で導入した方が学習者の混乱が防げるとしている。

2.3 各種コーパスを対象とした研究

書き言葉コーパスを対象としている研究としては、さまざまなジャンルのコーパスを用いて接続表現の使用実態を調査した石黒他(2009)が挙げられる。石黒他(2009)では、新聞の社説、新聞のコラム、学術論文、エッセイ、小説、シナリオという異なるジャンルのコーパスを対象に、①総文数に対して何%ぐらい接続表現が用いられているか、②個々の接続表現の形式がそれぞれいくつ使われているか、を調べている。その結果、総文数に対する接続表現の頻度が最も多かったジャンルは講義(36.9%)であり、続いて論文(25.5%)、エッセイ(13.2%)、社説(12.2%)、小説(10.4%)、コラム(7.9%)、シナリオ(3.0%)の順であった。この結果から、石黒他(2009)は、ジャンルによる接続表現の多寡が明確であり、論理性が重視される学術的な内容の文章・談話が接続表現と相性がよい様子がうかがえるとしている(p.79)。

また、金(2014)では、金澤編(2014)『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』(以下「YNU書き言葉コーパス」とする)¹に収められている12種類のタスク1080編の作文における接続詞の使用実態を明らかにしたうえで、日本語学習者の「そして」の多用に注目し分析を行っている。特に、下位群では「そして」の使用が目立つが、日本語レベルが上がるにつれて「また」の使用が多くなっていると述べ、その原因は「そして」と「それから」などとの混同による誤用が減り、さらに段落や複段落で書く能力ができてきたことであると指摘している。

最後に、呉(2015)では、接続詞教育の見直しのため、実際に学習者の中で接続詞がどのように使われているかを分析する必要があるとしたうえで、書き言葉と話し言葉の両方を対象に母語話者と学習者の使用実態を比較・分析を行っている。さらに、その分析結果と日本語教科書の出現頻度を比較し、接続詞が現在学習者にどのように教えられているかを考察している。その結果、「現在日本語教育のなかで接続詞は学習者のニーズに十分に答えられていない」とし、日本人と学習者の使用頻度、誤用の多いもの、学習者のレベルなどさまざまな要素を考慮し教え方を工夫する必要があると提案している(p.15)。

2.4 本研究の目的

本研究では先行研究から明らかになった①文章のジャンルによって使用される接続表現が異なっていること(石黒他2009、金2014)、②テーマ・分量・ジャンルなど条件が同一の場合学習者の方に接続詞が多いこと(浅井2003、金2014)を踏まえ、接続詞の使用において学習者の母語による違いがあるかどうかを明らかにすることを目的とする。浅井(2003)では中国語母語話者のみを対象としているが、他の言語母語話者の場合も同様の結果が出るかどうかの検討が必要である。しかし、管見の限りでは、接続詞の使用において学習者の母語を考慮している研究は見当たらない。文法項目や語彙の選択に見られるような母語の影響というものがあるかもしれない。そこで、本稿では、調査資料として、「YNU書き言葉コーパス」に収められている日本語学習者と日本語母語話者の書き言葉データを用いることにする。「YNU書き言葉コーパス」では、日本語母語話者30名、韓国語母語話者30名、中国語母語話者30名に対し12種類の同じタスクが課されている。そのため、文章のジャンルの偏りにより出現する接続詞に限られてくることをある程度防ぎ、母語の異なる学習者同士の比較が可能となっている。

¹ 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』は通称「YNU書き言葉コーパス」と言われており、YNUとはYokohama National Universityの略である。

2. 5 分析の枠組み

本稿では、接続詞の類型においては市川（1978）に従って分類を行う。西（1995）でも述べられている通り、これまでの接続詞のタイプの分け方には諸説あるものの、「累加型」という名称が最も多く使われているということ以外はほとんどが市川（1978）の案と一致しているためである。また、接続詞として取り上げ分析する対象としては形態素解析器「ChaSen（茶筌）」の解析結果に従うことにする。なお、本稿では接続詞として抽出されたものを比較するため、市川（1978）の「連鎖型」は本稿では取り扱わないことにする。

3. 調査

3. 1 使用コーパスの概要

本稿で使用したコーパスは「YNU 書き言葉コーパス」に収録されている、12 種類のタスク×90 名分=1080 編である。本コーパスには日本語・韓国語・中国語母語話者各 30 名分の作文が収録されており、韓国語・中国語母語話者の学習者については、一定の評価基準によりレベル分けされた上位群・中位群・下位群の各 10 名ずつのデータが収められている。「YNU 書き言葉コーパス」は読み手、伝達媒体、長さなどが考慮されて作られており、一人の被験者が 12 種類のタスクを書いているという特徴がある。次の表 2 に「YNU 書き言葉コーパス」の詳細を示しておく。

表 2 YNU 書き言葉コーパスのタスク（金・金庭 2016 から抜粋）

「自発型」のタスク	読み手	「頼まれ型」のタスク	読み手
長さ A (短) 《1》メールで面識のない先生に本を借りる 《2》メールで友人に本を借りる 《3》レポートでグラフを説明する	特定・疎 特定・親 不特定	長さ A (短) 《7》メールで先生に観光スポット・名物を紹介する 《8》メールで先輩に起こった出来事を友人に教える 《9》広報誌で国の料理を紹介する	特定・疎 特定・親 不特定
長さ B (長) 《4》メールで学長に奨学金増額の必要性を訴える 《5》手紙で入院中の後輩を励ます 《6》新聞の投書で市民病院の閉鎖について意見を述べる	特定・疎 特定・親 不特定	長さ B (長) 《10》メールで先生に早期英語教育の意見を述べる 《11》メールで友人に早期英語教育の意見を述べる 《12》小学生新聞で七夕の物語を紹介する	特定・疎 特定・親 不特定

3. 2 調査結果

3. 2. 1 類型別接続詞の出現数

まず、日本語学習者と日本語母語話者の接続詞の使用状況を比較するため、形態素解析により抽出した接続詞を類型別に分類し、母語別に使用されている接続詞の数を比較した。前述の通り接続詞のタイプの分類に関しては市川（1978）に従った。その結果、表 3-1 のようになった。表 3-1 における中・韓・日はそれぞれ中国語母語話者、韓国語母語話者、日本語母語話者のことを指しており、「=」の数字は各母語話者別の接続詞の合計である。また、（ ）の数字は接続詞の合計に対する類型別接続詞の割合を表している。

表 3-1 接続詞の類型別にみた使用状況

類型	韓=687	中=733	日=538
順接	146 (21.3%)	172 (23.5%)	111 (20.6%)
逆接	200 (29.1%)	142 (19.4%)	138 (25.7%)
添加	157 (22.9%)	231 (31.5%)	180 (33.5%)
対比	9 (1.3%)	17 (2.3%)	9 (1.7%)
転換	115 (16.7%)	75 (10.2%)	40 (7.4%)
補足	46 (6.7%)	76 (10.4%)	55 (10.2%)
同列	14 (2.0%)	20 (2.7%)	5 (0.9%)

表 3-1 から、中国語母語話者＞韓国語母語話者＞日本語母語話者の順で接続詞の使用が多く、日本語学習者の方が日本語母語話者より接続詞を多用していることがわかる。これは、浅井（2003）の結果とも一致するものである。次に、類型別の使用数を比較すると、中国語母語話者と日本語母語話者は「添加」の接続詞を最も多く使用しているが、韓国語母語話者は「逆接」の接続詞を最も多く使用している（網掛けの部分）。類型別使用数における上位 3 位を母語別に比較すると、中国語母語話者は「添加」＞「順接」＞「逆接」の順であり、韓国語母語話者は、「逆接」＞「添加」＞「順接」の順になっている。また、日本語母語話者の場合は、「添加」＞「逆接」＞「順接」の順であり、類型別の使用数では三者ともに上位 3 位までの使用傾向が異なっている結果となった。日本語母語話者の場合、「添加」＞「逆接」の順となっているのは浅井（2003）の結果と一致している。しかし、中国語母語話者の場合は、「添加」の次は「逆接」ではなく「順接」となっており、浅井（2003）とは異なる結果となった²。「YNU

² 浅井（2003）では、調査対象としている作文のテーマが一つであるのに対し、「YNU 書き言葉コーパス」では 12 種類のテーマの作文があることから結果に違いが見られた

書き言葉コーパス」において同一の種類タスクが課されていることを考慮すると、母語によって好まれる接続詞の種類は存在するといえそうである。本稿では、違いが明らかになったもののうち、韓国語母語話者の「逆接」の接続詞の使用に注目し、その詳細についてみていくことにする。また、中国語母語話者に最も多く現われていた「添加」の接続詞の使用については機会を改めることにしたい。

3. 2. 2 「逆接」の接続詞の詳細

表3-2は、韓国語母語話者に最も使用が多かった「逆接」の接続詞を50音順で並べたものである。

表3-2 「逆接」の接続詞の使用の詳細

接続詞	中=142	韓=200	日=138
いや	0	2	1
が	3	0	1
けど	1	0	1
けれども	3	0	1
しかし	93	118	67
しかしながら	1	0	0
それでも	1	3	10
それなのに	0	0	1
それにしても	1	0	0
だが	1	6	1
だからといって	0	0	1
だけど	0	1	3
ですが	0	2	5
でも	35	55	41
ところが	2	10	4
なのに	0	3	1
にもかかわらず	1	0	0

表3-2の接続詞別の使用数を比較すると、最も多く使われているのは、三者ともに「しかし」であり（網掛けの部分）、その次に「でも」が続く。「しかし」と「でも」を合わせると、三者ともにほぼ8割以上を占めており、17種類の接続詞のうち「しか

ものと考えられる。

し」と「でも」以外はあまり使われていないことがわかった。「しかし」の場合は、韓国語母語話者>中国語母語話者>日本語母語話者の順であり、「でも」の場合は、韓国語母語話者>日本語母語話者>中国語母語話者の順になっているが、いずれの場合も韓国語母語話者の使用が最も多い。

以上、中国語母語話者と韓国語母語話者、日本語母語話者の接続詞を類型別に分類した結果から、韓国語母語話者に最も多く見られた「逆接」の接続詞を取り上げその詳細を比較した。次の節では、接続詞の使用傾向の違いについて考察する。

4. 考察

4. 1 「しかし」の使用と意見の述べ方について

接続詞の類型別の使用状況の調査から中国語母語話者と日本語母語話者の場合、「添加」の接続詞を最も多く使用していたが、韓国語母語話者は「逆接」の接続詞を最も多く使用していたことが明らかになった。そこで、その原因を探るためタスク別の使用状況を調べた結果、表4-1のようになった。表4-1は、「逆接」の接続詞のうち、三者ともに最も多く使用されていた「しかし」のタスク別使用状況を表したものである。まず、「しかし」におけるタスク別使用状況を見てみると、三者ともにタスク12で最も多く使用されていることがわかる。また、タスク3、タスク6もほかのタスクに比べ多く用いられている。これは、これらのタスクが「YNU 書き言葉コーパス」の12種類のタスクのうち「逆接」の接続詞が用いられやすいタスクであるためであると考えられる。

表4-1 「しかし」のタスク別使用状況

タスク	中=93	韓=118	日=67
タスク1	6	4	2
タスク2	1	0	0
タスク3	12	17	8
タスク4	5	3	4
タスク5	8	9	3
タスク6	11	10	11
タスク7	1	4	0
タスク8	0	0	0
タスク9	8	7	3
タスク10	3	14	2
タスク11	2	1	0
タスク12	36	49	34

例えば、タスク3は、レポートである会社のデジタルカメラの販売量の推移を表し

た U 字カーブのグラフの説明であることから、売り上げが減った時点、売り上げが回復した時点など、売り上げに変化が起きた時点の説明に「逆接」の接続詞が用いられやすい。また、タスク 6 は、新聞の投書で市民病院の閉鎖について意見を述べるタスクであるため、病院の存続を訴え、閉鎖による弊害を述べる場面で「逆接」の接続詞が用いられやすい。さらに、タスク 12 は「七夕」の物語であることから、①恋に落ちてそれぞれの仕事をしなくなった織姫と彦星が天の神様に怒られてからも仕事をしなかった場面、②別れさせられた二人が仕事どころか悲しんでばかりいる場面、③年に一回の再開の時に洪水で天の川を渡ることができない場面などで「逆接」の接続詞を使用する必要があり、使用も多くなったと考えられる。三者ともにこれらのタスクではほかのタスクに比べ「しかし」の使用が多く見られている。

ここで再び表 4-1 を見てみると、韓国語母語話者の場合、これら 3 つのタスク以外に、タスク 10 でもその使用が目立つ（網掛け部分）。タスク 10 は早期英語教育に対して賛成か反対の意見を述べるタスクであり、文章の展開のパターンが決まっているタスク 3、6、12 とは違って、各々の立場から意見を述べなければならない。このようなタスクの特徴において、韓国語母語話者に「しかし」の使用が顕著に見られたのは、意見を述べる際に「しかし」を好む傾向があるためではないかと考えられる。そこで、タスク 10 における三者の意見の述べ方を比較してみた。例 (1) (2) は中国語母語話者のタスク 10 の一部を引用したものである。また、それぞれの例における () の数字は「YNU 書き言葉コーパス」におけるインフォーマントの番号である。なお、文の理解に支障があると思われる誤用の部分には修正を行っている。

まず、中国語母語話者の意見の述べ方の傾向についてみていくことにする。中国語母語話者の場合、例 (1) のように早期英語教育に対し賛成か反対かの意見を述べた文の後に、「なぜか」と「その理由としては」などのようにすぐに賛否に対する理由を述べる傾向があった。

- (1) 私は、早期英語教育に賛成です。なぜかという、私も中国の小学校で 3 年の時から英語の授業を受け始めていて、それに続き、中、高校で一貫して学んできたからです。(C001)
- (2) 早速ですが、【C061】が (→わたしは) 早期英語教育に賛成だと思っています (→賛成です)。その理由としては、まず語学教育については、子どもにとって早いうちにやるほうが習得しやすいという研究結果が出されているが、あまり早いと (幼児)、子どものアイデンティティに影響が出るおそれがあるため (→ありますが)、3 年生からはとてもいいと考えられます。(C061)

中国語母語話者はこのように「しかし」を用いることなく「なぜか」と「その理由は」などの「補足」関係の接続表現を用いて意見を述べている。それに対して、韓国語母語話者は、次の例 (3) のように「①自分の意見 (反対)」→「②逆の立場の意見」→「③それに対する反論」のような順で意見を述べる傾向があった。また、例 (4) のように「①自分の意見 (賛成)」→「②賛成の条件」→「③それに対する理由づけ」のような順で意見を述べており、ある条件のもとであれば賛成ということ意見で意見を述べている傾向がある。韓国語母語話者の場合、「補足」関係の接続詞を使用するよりは、「逆接」関係の接続詞を用いた反論を通して自分の意見を述べることで、強調したり、説得力を持たせる過程において、必然的に「しかし」の使用が多くなったのではないかと考えられる。

- (3) ①私は早期英語教育について反対です。②もちろん早期教育のメリットがあるため、韓国でも日本でも多くの親たちが自分の子供に早い時期から語学教育をさせているだろうと思います。グローバル化が進んでいる今英語は特にその最前先に立っていると思います。③しかし、まだ自分の母語が確立されていない子どもにまた新しい言語を与えることはあまり望ましくないことだと思います。(K006)
- (4) ①僕は、早期英語教育に賛成です。②しかし強圧的な教育ではなく、子供達が遊びとして楽しめる授業であればという前提です。③まず、年を取れば取るほど、語学を取得する能力がだんだん落ちるという研究発表を接したことがあります。それは、研究成果だけではなく、教育において英語を机の上で勉強すべきの学問として扱う社会雰囲気に影響されるのが理由だと思います。(K035)

一方、日本語母語話者の場合は、例 (5) のように「なぜなら」などを用いて理由を述べるか、例 (6) のように接続詞を用いずに理由を述べる者が多かった。「なぜなら」「その理由は」などの「補足」関係の接続詞あるいは接続表現を用いたのは 30 名中 11 名であった。また、韓国語母語話者と異なり、条件付きの賛成の場合でも、例 (7) の「ただし」のような「補足」関係の接続詞を用いるという特徴が見られた。

- (5) 私は英語早期教育に賛成です。なぜなら、今後よりグローバルな社会になっていく中で、単一民族単一島国国家での単一言語のみで生きていくことは大変もったいないと思うからです。(J011)
- (6) 早期英語教育については、賛成です。今、現在の社会は急速に国際化が進んでおり、日本でも、多くの外国人を見かけることがあります。そのなかで今

の子どもたちは、生活していかなければならないので、英語の習得は必須だと私は思っております。(J003)

- (7) 早期英語教育についてですが、私は賛成です。ただし、その教育は Speaking に力を入れたものに限ります。これからの社会において英語を話すことが出来るというのはかなりのアドバンテージになり得ます。(J024)

上記のように日本語母語話者の意見の述べ方は中国語母語話者と類似しており、韓国語母語話者とは異なる傾向にあった。以上のことから、三者の意見の述べ方の違いが接続詞の使用有無や接続詞の種類に影響を及ぼしていたものと考えられる。

4. 2 「しかし」の使用と説明の述べ方について

前節では韓国語母語話者の「逆接」の接続詞「しかし」の使用が多い理由としてタスク 10 を取り上げ意見の述べ方が中国語母語話者や日本語母語話者と異なっていることを述べた。本節では「逆接」の接続詞の使用箇所がある程度決まっているタスクのうち、韓国語母語話者にその使用が多かったタスク 3 を取り上げ、比較を行うことにする。

タスク 3 は、あるデジタルカメラ販売会社 (A 社) の 2004 年～2010 年の販売推移を表した U 字曲線のグラフの内容を説明するタスクである。グラフからわかる情報は①2004 年 10 万台、②2005 年 8 万台、2006 年の 6 万台に減少、③2007-2008 年 6 万台と横ばい状態、④2008 年-2009 年 8 万台に増加、⑤2010 年 10 万台に回復、である。したがって、「しかし」が用いられると考えられる箇所としては、増減の変化が見られた②④⑤の部分である。そこで、実際にどの箇所で「しかし」を使用していたのかを調べてみた。その結果、中国語母語話者は、「しかし」を使用している 12 例のうち、例 (8) のように②で使用しているものが 1 例、例 (9) のように④で使用しているのが 11 例あった。

- (8) 発売当時の 2004 年には、一時的に人気商品になり、販売台数は十万台に達しました。②しかし、それ以降の 2 年間、販売台数は 2006 年の六万台に減ってしまった。(C042)
- (9) ③2006 年から 2008 年から少しだけ上がったが、大した変りはなかった。④しかし、2008 年から 2010 年の間に急速に上がったが、⑤2004 年の 100 万台を上回ることはできなかった。(C002)

また、日本語母語話者の場合は、全体の 8 例のうち、②での使用が 1 例、③での使用が 2 例、④での使用が 5 例であった。それぞれに該当する例を例 (10) ～ (12) に

提示しておく。日本語母語話者の場合、中国語母語話者にはない③での使用が 2 例見られたが、④での使用がどちらも最も多かった。

- (10) ①2004 年 A 社のデジタルカメラの販売台数は 10 万台であった。②しかし、その後 2006 年までの 2 年間で急速に売り上げは下がり、2006 年には 6 万台で、4 万台の売り上げ減少となった。(J016)
- (11) ①2004 年には 10 万台だったが、②その後の 2 年間は年、2 万台減のペースで下降線をたどり、2006 年には 6 万台まで売り上げは落ち込んだ。③しかし、その後の 2 年間はグラフはほぼ横ばい状態を保ち 6 万台をキープしている。(J013)
- (12) ③2006 年～2008 年の 2 年間はやや上昇といったところだが概ね腹ばい状態である。④しかし 2008 年から昨年までの 2 年間で業績は急激に伸び、⑤2010 年には 2004 年とほぼ同じ約 10 万台を記録している。(J022)

一方、韓国語母語話者の場合は、「しかし」の使用 17 例のうち、②での使用が 8 例、④での使用が 7 例、⑤での使用が 2 例見られた。それぞれの例を例 (13) ～ (15) に提示しておく。

- (13) ①A 社がデジタルカメラを販売し始めたのは 2004 年で 10 万台といういい成果を出した。②しかし、それ以来の販売台数は減り続けて 2006 年には 6 万台しか売れなかった。(K008)
- (14) ③2006 年から 2008 年までは販売量が増加したが増加量は微小値である。④しかし 2008 年からは販売台数が急激に上がって、2010 年基準で 2004 年のデジタルカメラの販売台数の 10 万台とほぼ同じくらいまで達した。⑤2010 年の販売台数は 10 万台より少し少ない。(K021)
- (15) ①2004 年は 10 万台を販売していたが、②2 年後の 2006 年には約 4 万台が減り、6 万台の販売にとどまった。2008 年にほんの少しのびただけで、約 6 万台だった。⑤しかし、電子機器としたら珍しいことに、2010 年にはまた 4 万台増え約 10 万台の販売に成功している。(K006)

韓国語母語話者の場合、日本語母語話者と中国語母語話にはあまり見られない②の箇所での使用が多いという特徴がある。タスク 3 は、「しかし」を用いずに、接続助詞「～が」などを用いることで十分説明できるタスクである。実際に日本語母語話者の場合は、例 (16) (17) のように「しかし」などの接続詞を使用せずグラフの変化を説明している箇所も多く見られる。例 (16) を見ると、「売り上げているが」「続いた

が」を使用し変化前の状態を述べ、変化の部分では「減少していき」「売上げが伸び」のような連用中止形を用いながら変化を効果的に説明している。さらに、例(17)では「激減する」という語彙を用いることで急激な変化を表している。

(16) 2004年は10万台を売上げているが、次第に売上げが減少していき、2年後の2006年には半分近く減って6万台となった。2008年までその状態が続いたが、その後は売上げが伸び、2010年には2004年と同じく10万台近くを売上げている。(J025)

(17) 見ての通り、2004年と2006年の間には販売台数は激減し、2年で4万台の減少をした。その後も販売台数の低迷は続き、2008年に若干の回復がみられる。若干の回復の後勢いに乗り4万台増となり、2010年には2004年と同量の10万台の販売数にまで売上げ回復をした。(J005)

韓国語母語話者の場合、②の箇所での「しかし」の使用が多かったが、その理由の一つには前述したような日本語母語話者の文と文をつなぐ能力、つまり接続詞以外の様々な手段を効果的に駆使し説明するという能力がまだ身につけていないことが考えられる。ただしこれは韓国語母語話者に限ったことではないと思われるが、中国語母語話者の場合は日本語母語話者と同様に②での使用が1例しか見られなかったということを見ると、韓国語母語話者の「しかし」の使用が多かった理由は他にもあるように思われる。

韓国語母語話者の場合は、特に②の売上げが減少する部分で「しかし」の使用が多かったのは販売台数の減少を全体の変化の中でより強調すべき箇所として捉えていたからではないだろうか。日本人がグラフの変化が起きる箇所を説明する際に、文の前後関係を中立な立場から客観的に述べている傾向があるのに対し、韓国語母語話者は販売台数の減少を否定的に捉えているため、②の箇所で「しかし」を用いているのではないかと考えられる。

4. 3 日本語教育への示唆

以上の結果から、韓国語母語話者の場合、「逆接」関係の接続詞「しかし」の使用において中国語母語話者や日本語母語話者とも異なる傾向にあることがわかった。今後の接続詞の指導には、このような学習者の母語による特徴を日本語教師が把握しておくことも必要ではないだろうか。特に、今回明らかになった意見文における意見の述べ方、説明文における中立的な立場からの説明の仕方など、文章の展開に接続詞の使用がかかわっていることを認識し、指導に活かす工夫をする必要があると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本稿では「YNU 書き言葉コーパス」を用いて学習者と日本語母語話者の接続詞の使用状況を比較した。その結果を以下にまとめる。

- ① 接続詞を類型別に比較した結果、日本語母語話者と中国語母語話者は「添加」の接続詞の使用が最も多いのに対し、韓国語母語話者は「逆接」の接続詞の使用が最も多く、母語によって接続詞の使用状況が異なっていることがわかった。
- ② 「逆接」の接続詞の詳細を比較した結果、他言語母語話者に比べ韓国語母語話者に「しかし」の使用が多いことがわかった。
- ③ タスク別に「しかし」の使用状況を比較した結果、三者ともにタスク12での使用が多いというのは共通していた。だが、韓国語母語話者はタスク10とタスク3でも使用が多く見られた。
- ④ タスク10における「しかし」の使用の詳細を調べた結果、韓国語母語話者は意見の述べ方が中国語母語話者や日本語母語話者と異なっていた。詳しくは、「意見」→「理由」の展開ではなく、「意見」→「しかし」を用いた反論または条件→「理由」の展開となっているものが多いことがわかった。
- ⑤ タスク3における「しかし」の使用の詳細を調べた結果、デジタルカメラの販売台数の推移を表すU字曲線のグラフで販売台数の減少を説明する際に韓国語母語話者は「しかし」を多く用いていることがわかった。しかし、中国語母語話者と日本語母語話者は、販売台数の増加や回復部分で使用するか、あまり使用していなかった。韓国語母語話者は減少や増加などを説明する際に、減少の部分より強調する傾向があることがわかった。

以上の結果を活かし、接続詞の指導に当たり、文章の構成や意見の展開においても母語による違いがあることを教師が意識する必要があると考えられる。今回は韓国語母語話者の「しかし」に焦点を当てて考察を行ったが、今後は中国語母語話者の接続詞の使用傾向についても検討していきたい。

〈参考文献〉

- 浅井美恵子(2003)「論説的文章における接続詞について—日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較—」『言葉と文化』4 pp.87-97 名古屋大学
- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文社出版
- 石黒圭他(2009)「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学センター紀要』12 pp.73-85 一橋大学

- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版
- 金澤裕之編 (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』 ひつじ書房
- 金蘭美・金庭久美子 (2016) 「書き言葉における日本語学習者の文体の使用状況：『YNU 書き言葉コーパス』を用いて」『ときわの杜論叢』3 pp.47-65 横浜国立大学国際戦略推進機構
- 金蘭美 (2014) 「『YNU 書き言葉コーパス』における日本語非母語話者の接続詞の使用—「そして」の多用に注目して—」『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』pp.267-286 ひつじ書房
- 倉持益子・鈴木秀明 (2007) 「日本語学習者による接続詞の習得—留学生の接続詞使用状況—」『神田外語大学紀要』19 pp.211-234 神田外国大学
- 呉薔藝 (2015) 「接続詞教育の見直しの必要性—接続詞の用法と学習者の使用頻度、誤用から—」『国文目白』54 pp.1-16 日本女子大学
- 佐久間まゆみ (1983) 「文の接続—現代文の解釈文法と連文法—」『日本語学』2-9 pp.33-44 明治書院
- 西由美子 (1995) 「新聞社説における接続表現の出現傾向」『国語研究』第34号 pp.85-93 日本女子大学国語国文学会